

宮地隆廣著

『解釈する民族運動——構成主義によるボリビアとエクアドルの比較分析——』

東京大学出版会 2014年 vi+352 ページ

ふじ た まもる  
藤 田 護

I

1990年以降に国政に影響を与える大きな動員力を先住民運動がもつようになったエクアドルと、選挙参加と街路での抵抗を組み合わせた運動の展開から2006年には先住民出身の大統領エボ・モラレス(Evo Morales)が誕生したボリビアでは、現代ラテンアメリカのなかでも先住民運動が際立った存在感をもってきた。そしてそれは、1960年代からの地道な組織化の努力を経たうえでの展開でもある。本書および新木[2014]という2冊の本格的な研究書の相次いで刊行は、このような状況を受けてその背景・要因を探求し、そして新しい時代を見通そうとする者に対して、重要な調査と思索の跡を提供してくれる歓迎すべき出来事であり、今後の研究が目指し乗り越えるべき水準を指し示している。

村上・遅野井[2009, 29]は、これまでのアンデス諸国に関する日本国内の出版はペルーとベネズエラが中心で、「アンデス諸国全体を対象とした政治関係の専門書は皆無で、本書が初めてである」と述べていた。その数年後に、エクアドルとボリビアについて綿密な問題設定に基づく研究書が成ったことは、ラテンアメリカ政治の、とくにアンデス政治の研究における研究者と研究活動の充実を如実に示している。

以下では、本書の概要を記し、続けて評者による数点のコメントを付すこととした。

II

本書の元を成しているのは2011年に提出された博士論文である。本書の目次は以下ようになっており、理論枠組みと実証、そしてボリビアおよびエクアドルそれぞれの高地と低地での先住民運動が整然とした構成の中に収められている。

- 序 章 規範形成から民族運動を分析する——問題設定と着眼点——
- 第1章 実証的構成主義——フレームワーク——
- 第2章 ボリビア I——高地先住民運動——
- 第3章 ボリビア II——低地先住民運動——
- 第4章 エクアドル I——高地先住民運動——
- 第5章 エクアドル II——低地先住民運動——
- 終 章 解釈する民族運動——結論と含意——

序章では、個々の先住民運動が示す多様性に着目することの重要性が強調された後に、先住民運動による政権獲得行動のもつ共通性と差異とが本書において取り扱われる問題として設定され、経験の解釈とそれに伴った規範(行動基準)の形成に着目する構成主義の立場からこの問題に対して接近していくことが示される。

第1章では、構成主義が想定するのが内省を通じて自らのアイデンティティや立脚すべき規範を創造、承認、修正する人間であることが示される。また本書において採用される方法として先住民運動による発言(宣言文書等)に着目し、そこでとくに他者からの影響を受けて規範が再構成されていく過程に注目することが示される。

第2章では、ボリビアのインディアニスタ集団、および高地の農民・先住民組織であるCSUTCBの2つの勢力が対象となる。1970年代末からの民政移行期から制度内権力獲得(自らの政党による選挙参加)を継続してきた先住民運動が、80年代中盤から制度外権力獲得(ゲリラ組織による闘争および民族議会の創設)の試みとその不成功を経て、92年以降再び選挙参加のみに限定された権力獲得志向を示すようになる過程が検討される。

第3章では、ボリビアの低地先住民組織のCIDOBが対象となる。長らく権力獲得志向をもた

ず陳情に重きを置いていた先住民運動が、高地先住民組織との対立や自らの組織の全国組織としての意識の高まりを受けて、1997年総選挙より制度内権力獲得（他政党との連携による選挙参加）を目指すようになる過程が検討される。

第4章では、エクアドルの高地先住民組織 ECUARUNARI および後の全国先住民組織 CONAIE 結成後の同組織内の高地先住民の動きが対象となる。ロドリゴ・ボルハ (Rodrigo Borja) 政権 (1988～92年) を重要な境目として、それまで権力獲得に消極的だった高地先住民運動が、制度外権力獲得 (先住民議会の創設、後に2000年クーデター支持) と、低地先住民運動の積極姿勢に後押しされ制度内権力獲得 (自らの政党結成による選挙参加) とを、並行的に目指すようになる過程が検討される。

第5章では、エクアドルの低地先住民組織 CONFENIAE および CONAIE 結成後の同組織内の低地先住民の動きが対象となる。高地先住民との対等な関係に基づき連携が模索されつつ、しかし低地先住民運動は高地先住民よりも早く1988年総選挙に向けて制度内権力獲得 (自らの政党結成による選挙参加) の志向を示し、高地先住民とは別に自政党を結成することを試みていたことが指摘される。その後、統一政党結成に向け高地先住民に対し積極的に働きかけ、1990年代末からは高地先住民の発想を取り入れ制度外権力獲得 (低地先住民独自の先住民議会の創設、後に2000年クーデター支持) を推進していく過程が検討される。

終章では、事例研究の結果が明快な見取り図にまとめられ、先住民運動による解釈が示す多様性を重視すべきことが再度主張され、民族運動が民主主義の規則を守るか否かは事前に決定されているものではないとの見解が示される。

各章の叙述は簡潔で、かつ主要な点のまとめが各章末に付されてもいるため、ここでの要約がほとんど必要がないのではないと思われるほどに、読みやすい構成となっている。

### III

本書の達成と長所は枚挙に暇がないが、数点を選り述べる。

まず問題設定の新しさがある。本書は先住民運動

による政権獲得行動に着目し、政権獲得の意思の有無と、さらには政権獲得の中に選挙を通じた制度内の権力獲得と革命や先住民議会創設を通じた制度外の権力獲得とを区別する。先住民運動という社会運動が政権獲得を目指すという側面への着目自体が、国家と社会それぞれを自立した領域と捉えがちな通常の問題設定をはみ出したものであり、ボリビアとエクアドルの先住民運動に着目することの独自性を十分に活かしたものとなっているように評者には思われる。ボリビアにおける1990年代の多文化主義と2000年以降の多民族国家を目指す動きの違いは、先住民による権力獲得が現実的課題として認識されるようになったことだとの認識を、評者はかつて示したことがあるが [藤田2009]、本書はそれがそれ以前の時代からの先住民運動による絶え間なき解釈と戦略の討議・策定に基盤をもつことを示している。

本書は明確な方法論上の意識に基づいた研究でもある。構成主義の方法を採用するにあたっての詳細な考察がなされており、とかく方法論の意識が希薄になりがちな地域研究とは一線を画し、政治学 (比較政治学) の確固たる研究として成立しているが、事実の重みをそれが殺すこともなく、各国の高地および低地の先住民運動の動態について新たな知見を提示することに成功している。

またこのような明確な方法論をもちつつも、本書および宮地 [2014] で著者自身が述べているとおり、本書の研究は認識および解釈という柔らかな領域へと積極的に踏み込んでいく。これは著者に多大な苦勞を強いる選択となったようであり (本書341ページ)、しかもその苦悩は十分に解消されてもいないようであるが、しかしこれによって、本書の研究は政治学あるいは社会科学の枠を越えて、他の分野の研究者との相互対話の可能性を開くに至ったといえよう。本書は要因の説明への志向と多様な解釈の存在とを架橋しようとした稀有な試みである。評者は、ラテンアメリカ研究に時としてみられる社会科学と人文系の不毛な分断と反目を乗り越えようとする潜在的可能性をここに読み取りたいと思い、また、そのように読まれてほしいとも思う。

本書がもつ視野の広さも重要な貢献である。とかくアンデス諸国の低地先住民運動は着目されにくく、それには高地の低地に対する差別意識も一役を

担っていくよう（ボリビアとエクアドル間での高地－低地関係の温度差も本書における重要な指摘である）。高地と低地の関係に着目したうえでボリビアとエクアドルを比較するという図式は、とかく自分の得意な一部分に集中しがちで、かつアンデス高地中心主義に陥りやすい先住民運動の研究にとって、健全でかつ必要な見取り図を我々に提供してくれる。

本研究が対象とする時代の選択の重要性も指摘したい。それは2000年代以降の左派転回の前史として、我々の理解を深めてくれる。ボリビアについて指摘するならば、とかく2000年のコチャバンバ（Cochabamba）市での水資源の民営化に反対する「水戦争」（Guerra de agua）以降の社会運動の盛り上がり強調されがちであるが、本書はその前段階にある1980年代から90年代のアンデス高地農民・先住民組合CSUTCB内部での闘争とコチャバンバ地域の農民勢力の台頭を丁寧を追っている（第2章）。また、ボリビア低地の先住民組織CIDOBがCSUTCBから受けた無理解と高慢な対応の経緯は、2011年以降のモラレス政権によるイシボロ・セクレ先住民領域・国立公園（TIPNIS）を縦断する道路の建設計画と、それに対する低地先住民の反対運動を理解するうえでも、その前段階として重要な位置付けを帯びるであろう（第3章、TIPNIS問題に関しては岡田〔2012〕を参照）。

以下には、本書の中で評者が不十分に感じた数少ない疑問点を挙げることにする。

第1に、本書で評者が十分に理解しきれないのは、「解釈」に与えられた不明瞭な位置付けである。たしかに、先住民運動が動員可能な資源や政治的機会構造に自動的に反応して行動するわけではなく、そこに異なる解釈（認識、意味づけ）の仕方が働くとする著者の主張（たとえば16ページ）は十分に納得のいくものであり、そこに混乱の余地はない。しかし、「規範」と「解釈」（認識、意味づけ）は、独立した変数ではなく緩やかに重なっているために、そして「規範」が実際の先住民の運動が採用した「行動」とほぼ一致してしまうために、規範の背後に存在するとされる解釈がなぜそのようであり、規範の変更の背後に存在するとされる解釈の変更がなぜそのように生じたのかの説明は十分ではないように、少なくとも評者には思える。解釈の多様

性を強調するといえば聞こえはいいが、これでは「解釈」が都合の良いブラックボックスになってしまう危険がある。規範が「静的」なものではない（例として153ページ）ことを指摘しただけでは、「説明」として十分なものにはならないのではないだろうか。

いくつか例を挙げる。ボリビア高地先住民が1990年代半ばに選挙を通じた政権獲得という目標へと舵を切ったのは、著者のいうように制度外行動への失敗の認識が原因なのだろうか、それともそもそも選挙に参加するとする目標を維持したコチャバンバ農民が主流になる過程でその認識が受容されたのだろうか（第2章）。おそらくこれは両方なのであるが、ここで働く解釈の過程は一筋縄ではいかないだろう。政権獲得に消極的だったボリビアの低地先住民運動が積極的な方向に舵を切ったのは、認識として自らを全国組織と位置付けたからだとされ、それ自体はそのとおりのであろうが、それは果たして「説明」になっているだろうか（第3章）。エクアドルの高地先住民運動は、既存政党への不信をボリビアの高地先住民運動と共有しつつも、権力獲得に消極的であるという点で対照を成しているが、その指摘だけでは事実を様式化しただけで「説明」になっていないのではないかと思われ、権力獲得志向への変化は当時の政治機会の変化でほとんど説明できてしまいそうである（第4章）。

この点と関連して、著者は第1章で「記憶論者」を強く批判しているが、その批判自体は妥当なのだが、本書はその限界を著者のような因果関係の厳密さによってではなく、むしろ発掘・着目した事実の力によって乗り越えた部分が大きいのではないだろうかというのが評者の感想である。だとすると、本来解釈（認識、意味づけ）を重視する構成主義が採用すべきなのは、本書のような簡潔な叙述ではなく、読者が当事者による内省の過程を追体験できるような厚みをもった記述なのではないかとも考えうる。本書の叙述は、そのような追体験を十分に可能にはしていない。

第2に、枠組みとして採用された構成主義について、そこにどのような新しい理論的知見を本研究が付け加え得たのかが明確ではない。序章から第1章へと至る流れでは、構成主義とその源流に対する目配りの良さは際立っているが、構成主義がもつ限界

やいまだ見ぬ新たな可能性が何であり、そこに本研究がどのように寄与しようとしているのか、少なくとも評者は読み取ることができなかった。これは本書における実証の重要性を否定するものではまったくないが、この著者に理論への新たな寄与を望めないとすれば、ラテンアメリカ研究において他の誰に望めばいいというのであろうか。

第3に、先住民運動が権力獲得を志向する際の具体的選択肢は互いに独立した変数として設定されているが、とくに制度内権力獲得と制度外権力獲得は互いに影響し合うのではないだろうか。たとえば時に応じて制度外権力獲得に踏み出すことで、継続したかつ強靱な制度内権力獲得への努力が可能になるという仮説を評者は思い付くことができる。また、本書の著者は、これらの複数の戦略の間で揺らぎをみせない一貫しない態度をあまり肯定的には評価していないようであり（第2章注88のフェリペ・キスベに関する指摘を参照）、それは評者も強く共感するところではある。ただし、植民地主義の下で長年にわたり続いてきた支配階層による先住民層の取り込みを考えるならば、先住民指導者層における戦略の揺らぎこそがむしろ常態であり、その中でいかにして強靱な権力獲得志向が実現するのかと問う方が、問いの立て方として生産的ではないだろうか。

最後に、本書の内容とは関係がないが、本書および本稿で言及した研究書がいずれも、おそらくは図書館での購入を中心に想定した高い価格設定となっていることは残念である。この価格では一般の読者が購入しにくく、ラテンアメリカに関心をもつ学生が自ら購入することも容易ではない。囲い込まれた市場の中でスペイン語の初級教科書が量産される状況が一方でありながら、ラテンアメリカ研究についての書籍は刊行数も少なれば求めやすい状況にも

ない。このような形の出版しか本当に可能性はないのであろうか。もちろんこれは、厳しい出版状況の中で本書の刊行を実現し得た著者に対する批判ではなく、出版界全体に対して感じる疑問点である。

上述の疑問点は本書の価値を損なうものではなく、本書の価格の高さにもかかわらず、広く読まれ、さらなる思考と研究・調査の起点となってほしいと強く望むものであり、評者自身も微力ながらそのような動きの一翼を構成したいと思っている。

### 文献リスト

- 新木秀和 2014.『先住民運動と多民族国家——エクアドルの事例研究を中心に——』御茶の水書房。
- 岡田勇 2012.「2012年ボリビアの政策課題——TIPNIS道路建設問題を事例として——」『ラテンアメリカレポート』29(1): 83-92.
- 藤田護 2009.「ボリビアにおける2000年代左派アジェンダの検討——先住民による権力獲得、多層的共存、現状を切り開く思想——」村上勇介・遅野井茂雄編『現代アンデス諸国の政治変動——ガバナビリティの模索——』明石書店。
- 宮地隆廣 2014.「著者自身による新刊書紹介『解釈する民族運動——構成主義によるボリビアとエクアドルの比較分析——』」『ラテンアメリカ・カリブ研究』21: 80-82.
- 村上勇介・遅野井茂雄 2009.「序論——現代アンデスの迷宮に分け入る——」村上勇介・遅野井茂雄編『現代アンデス諸国の政治変動——ガバナビリティの模索——』明石書店。

(東京大学大学院総合文化研究科助教)